

平成23年11月9日

宮崎県農政水産部
畜産・口蹄疫復興対策局
畜産課・家畜防疫対策室長 殿



管理獣医師の診療に係る調査について(回答)

上記の件について、下記のとおり回答します。

記

1. (1) 体温・糞便の量・質・食欲・飲水・排尿の有無・四肢の腫張・被毛の光沢反応の有無・鼻汁・発咳の有無について電話にて聞き取り
食滞・アシドーシスと診断した。生菌剤(ビオスリー)・健胃整腸剤(モーサン)の経口投与を指示した。
- 段々対象牛 → 食欲不振牛
頭数 → 20頭
投与量 → ビオスリー 1頭当り50g・モーサン1頭当り100g
- (2) 私は、平成17年4月から、各牧場()の牛群を診て来ましたが、肥育牛については、導入時の呼吸器・消化器症状・肥育中期のビタミン・後期の急性鼓張症・H・S等があり、過去の経験上から食欲癓続まで至らず、不振・微熱・軽度の発咳・鼻汁排泄は、各肥育ステージに係らず、牛群中には、散見されており、食欲改善処置・健胃整腸剤・生菌剤を投与すれば、治ゆする物を、過去にも経験しているので、今回の呼吸器症狀も軽度の一過性の物で、食欲改善処置すれば、治ゆするものと判断した。

(3) 治ゆ(食欲改善)した牛もいれば、新たに食欲不振に落いる牛が出て出荷直前に、ペニシリン投与(H-S)で急死でもさすなら、大変なのでペニシリン投与を指示した。

投与対象牛 → |群中(8頭)に1頭でもいれば、予防的に全頭投与

頭数 → 725頭

投与量 → 1頭当たり10ml(300kg以上), 1頭当たり5ml(300kg以下)

(4) (3)で記している様に、食欲改善処置すれば、治ゆた牛もいれば、新たに食欲不振に落いる牛が出てきた。牛群全体に一斉に急速に発症するなら、ウイルス性(RS、パイルフル)を疑うが、牧場の両サイドの牛舎から中の方に散発的に拡散ってきて、細菌性(マイコ・HS)を疑った。HSは5件の呼吸器症状初期に出て来るHSから急死するので確定診断では無いが、予防的に事被害の拡散を未然に防ぐ。牛群コントロールして、ペニシリン投与を指示した。

2. 牛群全体に抗生物質を投与するような状況事例はありますか。
平成2年1月初旬に [] で食滞(食欲不振)が出来事が
あります。この時は牛舎の1棟片側のみで、確かに8スパン(4頭だったと
思ひます。食欲改善処置(ビオスリー、モーサン経口投与)で回復
治ゆしに事例があります。

3. 有り(転入21頭、転出78頭、死亡8頭)

4. 実績と段々対象牛の車両ですが、治療報告書のとおりで、段々対象牛の車両については死亡検査書の無い牛と緊急出荷した牛以外は、治ゆしていると思います。尚治療報告書と死亡検査書は会社にて管理して、この事類については国の廃止前検査にてお預けしています。転帰頭数が何頭かは明確できません。又流早延産を含めた全体の死産率が [] %～[] %でいて、転帰率(治ゆ)は [] %～[] %くらいだと思います。巡回の記録ですが、出勤は二畜診療検診業務となっている所は、[] から [] のことで、どこの牧場に行ったりかは、明確できません。各牧場毎に作業日報といふのがありますかの中に記録されている牧場もあります。[] 以外の巡回は繁殖預託農家で、[] 県(北部[]戸、南部[]戸)、[] 県([]戸、[] 戸、[] 戸、[] 戸)です。

[] 常時平均飼養頭数、[] 頭で月1回定期巡回していました。繁殖預託農家の常時平均飼養頭数ですが、小規模な所で約 [] 頭、大規模な所で、約 [] 頭位です。[] に依頼があった時に往々行っていましたが、尚この定期巡回は平成21年11月まで行っていました。11月以降の定期巡回しなくなった理由は、私の[] 上の問題で、会社からの指示がありました。[] の巡回の件ですが、11月までは行っていましたが、立踏疫発生時までは行いません。11月の飼養頭数は、790頭です。

5. 行っていた牛はいます。これは主に繁殖母牛です。行っていた牛もいます。行っていた牛は、肥育牛で、この肥育牛は[] で育成されていて、物で、どこで育成された牛かで、専用されてから、牛群全体のエントロール管理から、過去の経験上ある程度の疾患発生予測と聞き取りで診断・判断していました。
5. 5. 申しおいた事と、私の過去の経験上から、牛群全体のエントロール管理し聞き取り判断で牛把握しています。